

平成30年度

自己点検・評価書  
(学校評価報告書)

附属幼稚園

## 1 附属幼稚園の現況

### (1) 学校名

大阪教育大学附属幼稚園

### (2) 所在地

大阪府大阪市平野区流町2-1-79

### (3) 学級数・収容定員

6級(1学年2級) 収容定員150人 (1学級30人 ただし3歳児は16人と14人)

### (4) 幼児・児童・生徒数

149人 (男児74人 女児75人)

### (5) 教職員数

園長(併任) 1人、副園長 1人、主幹教諭 1人、教諭 6人、養護教諭 1人、非常勤講師 2人  
事務職員 1人、臨時用務員 1人、スクールカウンセラー 1人  
栄養士 2人、調理師 1人

## 2 附属幼稚園の特徴

豊かな自然環境の中で身近な人々とのあたたかい触れ合いや、生き物たちとの日々の関わりを通して、やさしく、あたたかく、思いやる心が育つことを願っている。

幼稚園生活の主人公は幼児であり、幼児の思いや願いを大切に生活を中心としている。幼児は遊びを通して様々なことを学んでいる。遊びこそが幼児の生活そのものであり、今日の幼児の姿から明日の生活がつくり出されていく。常に幼児の今の姿を出発点として、個々の育ちや発達の状況、その時期にふさわしい遊び(生活)が展開されていくよう、努めている。

また、昭和23年より保護者手作り給食を実施しており、約70年間にわたって受け継がれている。子どもたちに手作りの温かいものを食べさせてあげたいという願いと共に、食の安全や衛生、アレルギー対応など、時代の変化に応じた給食作りを目指している。

## 3 附属幼稚園の役割

- (1) 学校教育法に基づく幼稚園教育を行う。
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う。
- (3) 本学学生の教育実習を行い、その指導を行う。
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

#### 4 附属幼稚園の学校教育目標

「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」

○ 3歳児・・・喜んで幼稚園へ来る子ども

生後わずか3年しかたっていない子どもであるが、一人の人間としてすばらしい力を持ち、一人一人がその子らしさを秘めている時期である。この1年をゆったりと大好きな先生に寄り添い、自分の好きな遊びに没頭し、明日も大好きな幼稚園に行こうと思うことが、これからの保育年限における健やかな育ちを期待する上で何よりも大切なことであるとする。

○ 4歳児・・・友達を見つけて、幼稚園の生活を楽しむ子ども

友達の存在に心を揺り動かし、幼稚園では「いろいろな友達がいる」「一人より友達と一緒に生活が楽しい」「友達と関わり合って育つ」等の体験をしながら、幼稚園生活の楽しさを味わい、思う存分遊ぶ子どもに育つことを願っている。

○ 5歳児・・・友達と心を通わせ、様々な生活に熱中する子ども

心身ともにたくましく、知的好奇心もぐんと増す時期である。試行錯誤を繰り返しながら全力で幼稚園の様々な生活に熱中し、一人でも、みんなとでも「やったね」という成就感を味わい、友達と力を合わせて楽しい園生活をつくり出す子どもに育つことを願っている。

#### 5 附属幼稚園の学校教育計画

1 人間尊重の教育

幼児一人一人の人権を守り、将来豊かな心で、生きる喜びを感じ、差別を克服し、困難に立ち向かう、しなやかな心と体をもった人間の育成に努める。

2 基本的な生活習慣の形成

幼児の行動を見守りながら、必要な時期に教師自身がモデルとなって援助したり励ましたりしながら、幼児が園生活にとって必要な行動であることを自覚し、自ら身に付けていくことを願っている。

3 道徳性の芽生え

園生活の中で、自分以外の友達や身近な人との関わりを通して他人の存在に気付き相手を尊重する気持ちを育てることから始まると考える。また、園内の豊かな自然環境や飼育動物との共生の中で、思いやりや責任感など人間性の根幹にふれる体験を大切にしよう努めている。

4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

幼児の生活が、より楽しく、より心地よく、より便利に、より目的に向かって充実するために必要な遊具や用具がある。これらの扱いを幼児自身が必要と感じた時に逃さず身に付けていくことと、3年ないし2年間の園生活の中で出会うことができるよう、指導計画の中に位置付けることとしている。

6 附属幼稚園の平成30年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	1 人間尊重の教育

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 一人一人の幼児 が自分らしさを発揮 し、多様性を認め合 える集団を育てる。	一人一人の幼児の 気持ちに寄り添った 関わりを教師が心掛 け、幼児の行動の意 味を知り、必要な 援助を行う。また、 未就園児や高齢者 など年齢や立場の 違った人と関わる 機会を多く持つ。	<p>幼児の一人一人の行動の意味を探り、肯定的に捉えることで、幼児が安心感をもって園生活を送ることができた。</p> <p>今年度から未就園児や高齢者と関わる機会を多くもつことで、幼児から自然に相手を思いやる言葉が出たり、相手に合わせて動くようになった。このような経験を通して同年齢の友達と関わる時にも相手の気持ちを考えながら行動するようになりつつある。</p>	<p>一人一人の幼児の行動の意味の捉え方は教師によって差が生まれる。教師間で幼児の捉え方を共有できるように、日々の話し合いを行ったり、実践事例を検討したりしていきたい。</p> <p>幼児の多様な姿を保護者同士も認め合えるように今後も啓発を行っていきたい。</p>	A	<p>未就園児園庭開放、高齢者との交流など、今までより画期的で開かれている。地域に開くことにより、附属幼稚園をもっとよく知ってもらえるのではないかと。高齢者との関わりでは自分たちが行くことにより喜んでもらえることが</p> <p>「自己有能感」「自己肯定感」が芽生えることになる。</p>	A	<p>多様性については違いを認め合っていけるように大人がモデルを示していけるようにしていきたい。</p> <p>次年度も互いを認め合えるように一人一人に寄り添った保育を実施すると共に、多様な人と関わる機会を多くもっていきたい。</p>
(2) 教職員間の情報交換を密に行い、幼児の内面の育ちについて共通理解する。	<p>日常的に幼児の姿の情報交換を行う。また、その折に、行動の変化だけでなく、内面の変化について話し合うようにする。</p>						

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	2 基本的な生活習慣の形成

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 一つ一つの生活習慣について必要感が分かり、丁寧に育てる幼児を育てる。	発達年齢に応じて、なぜ必要かを分かりやすく指導する。また、教育課程を再編するにあたり、細かな生活習慣一つ一つを見直していく。	生活習慣が身に付くために年齢に合わせた環境を構成することで、自ら身の回りの始末などを行う幼児が増えた。また、教育課程を全教員で見直す中で、3年間を見通しながら、その時期に必要な生活習慣を身に付けていけるように教師が意識することができた。	生活習慣面は幼稚園だけで身に付けていくことは難しい。幼児が心身共に自立していくために、必要な援助を保護者と連携しながら行っていきたい。		生活習慣面に関しては他園や市全体のデータを自園と比べることで、数値が高いところと低いところが見えてくる。家庭と共に生活習慣面を見直すことが大切ではないか。家族全員で家族の体調管理を知ったり、互いの体調を気遣ったりなどの取り組みもできるのではないか。		生活習慣面については家庭との連携をさらに密にし、園の生活との共通点や違いも互いに共有するような工夫をしたい。
(2) 災害時には幼児も教師も、落ち着いて考えて行動できるようにする。	避難訓練では様々な状況を想定し、教師も幼児も緊急時にどのように行動すればよいのかを、考えられるようにする。	今年度は大阪北部地震、台風21号と実際に災害に遭い、避難訓練の大切さを実感した。災害時に日頃の訓練の成果で、幼児は落ち着いて行動できていたようである。幼稚園としては災害時の保護者への連絡、園の安全な環境の在り方をさらに考える機会となった。	災害時に電話が繋がらない、メール配信しても相手に届くまでに時間を要するなど、新たな課題が見えた。その際の幼児の安否確認の方法など、今後も保護者と共通理解していきたい。 また、園の環境についても今一度安全確認を行っていく必要がある。	B	災害時には教師同士の情報交換も密にする必要がある。保護者とも緊急時対応について一緒に学ぶ機会が必要ではないか。 「ひらのBOSAIキャラバン」も有効な取り組みである。		災害時の対応については、常に見直しを行い、最善策を考えていきたい。また、園だけで対応を考えるのではなく、保護者や地域とも連携しながら進めることで、実際の災害時に役立つものになると考える。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	3 道徳性の芽生え

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 幼児が友達と関 わる中で葛藤やつま ずきを体験し、自分 の思いを出したり、 相手の思いに気付い たりできるようにす る。	一人一人の幼児の 育ちを丁寧に見取 り、友達と関わる中 で、自分の思い通り にいかないことや、 我慢しなければならない体験を積み重ね られるようにする。 また、集団としてど のように育てていき たいかということ を教師自身も意識し、 学級経営をしていく ようにする。	自己主張が強い幼児には、相 手の気持ちを落ち着いて聞く機 会を多くもてるよう心掛けた。 また、逆にいざこごを避けよう とする幼児には、まずは自分の 思いを相手にしっかり出せるよ うに、日々の保育で励ましてい った。いろいろな出来事を該当 幼児だけで話し合うのではな く、クラスの皆で話し合う機会 をもつことで、第3者の幼児も 自分のこととして考え、集団と して高まっていくようになった。	一人の幼児の葛藤やつま ずきを集団の課題として教師が 意識することで、集団として 高まることにつながった。一 方、つまずきや葛藤を経験す ることが少ない幼児もいるの で、教師が意識してそのよう な状況をつくり出すことも必 要だと感じる。	B	公立園では支援の必要 な幼児が共に生活するこ とで、いざこごも起き る。その関わりの中で育 ち合うことも多い。その 経験から、折り合いを付 けたり相手のことを思っ て動くことができている。もっと、幼児同士が ぶつかり合う経験が必要 ではないか。	B	幼児同士のいざこごが起 きたり、つまずいた時に最 後まであきらめない粘り強 さが少ない傾向もあるの で、教師自身がもっと根気 強く関わり、達成感を味わ ったり成就感を味わったり できるようにしていきたい。
(2) いろいろな人と 関わり、人と関わる 楽しさを味わう。	異年齢の友達や他 校種の人、地域の人と 関わる機会を設け、自 分の周りにはいろい ろな人がいることに 気付けるようにする。	日々の生活ではクラスや学年 を超えて、いろいろな友達と自 然に遊ぶ姿が見られた。他校種 の人との関わりでは小学1年生 との交流は積極的に行うことが できたが、他校種との交流は難 しさもあった。未就園児や地域 の高齢の方と触れ合う機会につ いては継続することで互いに関 わりを楽しみに待てるようにな ってきつつあると感じる。	教師が意識しているいろい ろな人と関わる機会を設けていく ことが必須である。交流は相 手とのやりとり時間に必要 となるが、工夫しながら今後 も継続していきたい。		他校園との交流は、や りとりが大変だが、幼児 にとっては必要な経験で ある。今後もさらに交流 を深めてほしい。		年間計画の中に他校種と の交流について位置付けら れるようにしていきたい。 また、突発的に依頼された 交流もできるだけ受け入れ たり、本園からも積極的に 交流できる機会を提案して いきたい。

学校教育目標	「すこやかに あたたかく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 幼児の発達に合った知識、技能の基礎を身に付ける。	教育課程、指導計画の見直しを進める中で、幼児の発達に合った知識や技能について教師が学びを深め、そのために必要な環境について教員間で共通理解し、実践する。	教育課程・指導計画の見直しを進める中で幼児の発達に合わせたふさわしい経験について考え合ったり、教師自身が学ぼうとする機会が増えたりした。それにより、発達に合わせた環境構成について考えることができた。また、教員皆で環境構成の研修会に出掛け、学びの機会を得ることができた。しかし、それを取り入れて園内の環境を構成しなおすということではできなかった。	教師自身が幼児の遊びを見直し、環境を構成することが大切である。近年、保育環境を評価するスケールも広まりつつあるので、それらに対してさらに学びながら、客観的に保育環境を見直していきたい。	B	環境構成はとても難しいものである。園舎の様子、職員の配置などいろいろなことが関わる。様々な機会でも学んで、独自のものをつくるのが大切である。視点が一つということの方が怖いのではないかと。幼児教育会の微妙な流れや流行りに左右されないようにしたほうがよいのではないかと。環境については遊びを再構成できるような環境、幼児が関わりたくなる環境、気付いて取り入れたい環境が大切で、一年中同じ環境ではないということも大切ではないかと。	A	保育に対する評価スケールを参考にしつつ、本園に合わせた環境を考えていくと共に、一人一人の教師らしさやかもしたず雰囲気大切に保育を行っていききたい。  教師同士で環境を学び合う機会をつくり、互いに学び合えるようにしていく。

